



会議レポート

じんもんこん 2015 開催報告

— 議論沸騰の3日間 in 京都 —

じんもんこんとは

2015年12月19～20日に、同志社大学京田辺キャンパスにてじんもんこん2015（第17回人文科学とコンピュータシンポジウム、副題：じんもんこんの新たな役割～知の創成を目指す文理融合のこれから～）¹⁾が開催されました。じんもんこんは、国内最大規模の人文科学と情報学の学際領域を主な対象としたシンポジウムであり、本会の人文科学とコンピュータ研究会（CH研究会）が主催となって毎年12月に開催されています。1999年の第1回シンポジウムを国立民族学博物館にて開催して以来今年で17回目の開催を迎えました。CH研究会は、1989年5月19日に第1回研究発表会を開催して以来、情報技術を活用した人文科学分野の研究、および人文科学に関連する情報資源の記録・蓄積・提供の推進について中心的な役割を果たしてきた研究会です。

じんもんこん2015では、従来どおり投稿論文はすべて査読付き論文です。ただし、従来はダブルブラインド制でしたが、今回よりシングルブラインド制になりました。じんもんこんの投稿論文には各機関が所蔵する研究資源に関する論文が少なからずあり、その実情に合わせた改善であると考えられます。また日本語論文のみの投稿と思われるがちですが、毎年のように英語論文も投稿されています。

じんもんこんでは、参加者との対話が非常に重要だと考えており、そのためポスター・デモ発表を重要視しております。口頭発表と同等、もしくはそれ以上という位置づけです。CFPにも、「（口頭発表とポスター・デモ発表の）いずれの発表形式も論文としての扱いは同等であり、概要論文の提出からカメラレディ論文の作成までの流れや採否の基準は同じです」と明記されています。30分程度の口頭発表では説明しきれない内容である場合、特に対話的に参加者とじっくり深い議論をする場合にはポスター・デモ発表を推奨しております。

CH研究発表会では紙媒体での論文集は廃止しておりますが、じんもんこんでは紙媒体での論文集作成を継続しています。さらに情報学広場からの論文の取得も可能であ

り、参加者のニーズに応じた論文の提供方式としてはベストであろうと考えております。

今回、査読を通過した発表は42本（うちポスター発表12本、デモ発表3本）でした。参加者は141名でした。

熱闘 じんもんこん 2015

本会議は2日間であり、9セッション（口頭発表が8セッション、ポスター・デモ発表が1セッション）、これ以外にも招待講演、特別講演、パネルディスカッションがありました。口頭発表はすべてパラレルトラックで構成されました。

口頭発表

口頭発表セッションは、文字情報処理、テキスト情報処理、デジタル・アーカイブ、時空間情報処理、画像情報処理、舞踊情報処理でした。このうちテキスト情報処理およびデジタル・アーカイブは2セッションありました。

一見すると、セッション名は以前からあまり変化していないように見えるため、研究動向があまり変わっていないように思われます。じんもんこん領域での本質的な研究課題（CH研究会としての研究課題）は変わっていないかもしれません。しかしながら、ここ数年ではセマンティックWebを応用した研究、今回では深層学習を応用した研究が登場しています。これら以外にもこれまで他領域で有用だと評価された情報技術のじんもんこん領域への適用に関する研究が多くの発表で報告されてきました。これは、じんもんこん領域の本質的な研究課題に対し新たな情報技術を導入し、それらが根付き、さらに発展させ、というサイクルが第1回シンポジウムから長い間続けられてきたことを意味すると考えています。

ポスター・デモ発表

今回も熱い発表が繰り広げられました（図-1）。私個人としては、じんもんこんの大きな見せ場の1つだと感じております。はじめにじんもんこん2015にご協力いただきました各団体の展示の紹介がありました。ご協力いただきました各団体にはこの場を借りまして厚く御礼申し上げます。引き続き、各発表について2分以内で報告するライトニングトークが行われ、後にコアタイムに移行し、1時間程度の熱戦が繰り広げられました。研究の中心となる部分についての討論、研究背景や研究プロジェクト、扱うデータ自体についての深い説明、この発表の次の展開など、ほかにもここには記述することが難しいような内容の説明・討論もありました。

招待講演・特別講演・パネルディスカッション

初日の午後最初のセッションは元ATR知能映像通信研究所代表取締役社長の中津良平氏による招待講演がありました。タイトルは「21世紀はアジアの時代か？」でした。中津氏のこれまでのご経験をもとにエンタテインメントやコミュニケーションというものがどう変化していったか、ということを哲学的に講演されました。

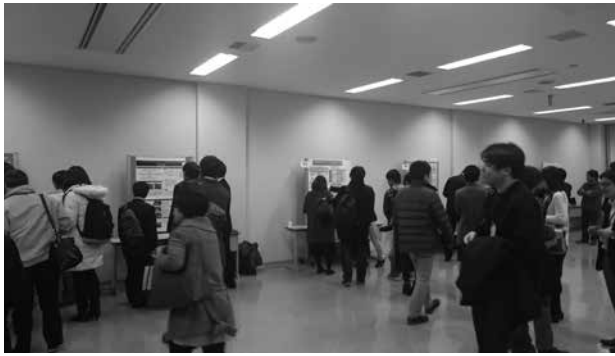


図-1 白熱のポスター・デモセッション

2日目の午後に、同志社大学の村上征勝氏による特別講演がありました(図-2)。村上氏はじんもんこん 2015 の実行委員会委員長であり、長年にわたってじんもんこん、特にテキスト分析について牽引されました。「どうなる文理融合、どうするじんもんこん—融合型研究・教育のあり方、必要性・重要性の周知—」というタイトルで、ご自身が行ってきた成果を報告されました。タイトルにもある文理融合をどう考えるかという問いを出されました。「じんもんこんが目指す文理融合は夢かまぼろしか、そうならないように頑張ろう」と述べられ、講演は締めくくられました。

特別講演に続くパネルディスカッションのテーマも文理融合であり、1時間以上のディスカッションが行われました。司会は同志社大学の阪田真己子氏、パネリストは立命館大学の八村広三郎氏、秋田大学の三浦武氏、筑波大学の松村敦氏、国立歴史民俗博物館の後藤真氏でした。文理融合型研究・文理協働型研究がもたらしたものの、およびこれの課題などが主な議論でした。10分程度ではありましたが会場の参加者との意見交換も行われました。

受賞

今回、ポスター賞に加え学生奨励賞および最優秀論文賞を設けました。受賞者は以下のとおりです。

<ポスター賞>

- ・間淵洋子氏、小木曾智信氏(国立国語研究所)「異なる文体の混在するテキストに対する複数辞書切り替えによる解析手法の提案」
- ・関野樹氏(総合地球環境学研究所)「暦に関する Linked Data とその活用」

<学生奨励賞>

- ・佐々木充文氏(東京大学/学術振興会特別研究員)「無辞書言語における自動処理: 現代ナワトル語の対話型タグ生成」
- ・北崎勇帆氏(東京大学)「動的計画法を用いた狂言台本の語の自動対応付け」

ポスター賞はポスター・デモセッションを終えた直後に行われた懇親会にて、学生奨励賞はクロージングの直前にて表彰されました。みなさま、受賞おめでとうございました。最優秀論文賞については、じんもんこん 2015 での発表を受け、2016 年 1 月 30 日に国立情報学研究所にて



図-2 村上征勝氏による特別講演

開催される第 109 回 CH 研究発表会(CH109)にて受賞者を発表し表彰します。

2015 年もやりました「じんもんそん」

じんもんこん 2015 が開催された前日(2015 年 12 月 18 日)に、併設イベントとしてじんもんそん 2015(歴史的典籍オープンデータワークショップ〜古典をつかって何ができるか!じんもんそん 2015〜)がメルパルク京都にて行われました。こちらの主催は国文学研究資料館であり、共催は国立情報学研究所でした(CH 研究会は後援)。このイベントは人文科学データに関するアイデアソンであり、2014 年から開始しました。参加者は 45 名でした。

このイベントでは 2 部構成でした。前半は国文学研究資料館の山本和明氏から「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」の概要説明があり、続けて国立歴史民俗博物館の後藤真氏と海野圭介氏から今回のじんもんそんで対象とする古典籍データセット²⁾の紹介がありました。後半は国立情報学研究所の大向一輝氏による司会のもとで歴史的典籍アイデアソンが行われました。ここでは古典籍データの新しい・面白い活用方法について、8 つの班に分かれディスカッション(30 分の 2 セット)を行い、古典籍データに対するソーシャルタギング、挿絵画像の SNS 利用など従来の国文学研究とは異なる斬新なアイデアが発表されました。

次のじんもんこんは ...

2016 年のじんもんこんの会場はまだ未定です。じんもんそんについても同様です。決まり次第 CH 研究会の Web サイトや ML などでお知らせいたします。これまで参加されていない方々にも、「おっ、じんもんこん面白い」と思っただけのような、また、これまでご参加いただいた方々にも、「またじんもんこんに来てよかった」と思える魅力的なシンポジウムを目指し、CH 研究会一同で励みたいと考えております。

参考 URL

- 1) じんもんこん 2015, <http://jinmoncom.jp/sympo2015/>
- 2) 国文研古典籍データセット, <http://www.nii.ac.jp/dsc/idr/nijl/nijl.html>

(山田太造/東京大学)